

# ルツァッティの協同組織金融思想に関する再検討

## Reconsideration of Luzzatti's Financial Cooperatives

長谷川 勉  
HASEGAWA Tsutomu

### 目次

#### はじめに

- 1 ルツァッティの動機－イタリアの経済的・社会的コンテキスト
  - 1-1 経済的コンテキスト
  - 1-2 経済政策の副作用
- 2 金融コンテキストからみた思想の枠組みとその実践的反映
  - 2-1 社会主義思想と反応
  - 2-2 通貨と信用に関する解釈
  - 2-3 当時の庶民金融とベルギーの信用組合
  - 2-4 シュルツェ型信用組合への接近
- 3 ドイツからの移入と変容
  - 3-1 思想の基底
  - 3-2 実践に反映された思想
  - 3-3 民主主義的マネジメント

#### おわりに

#### はじめに

Banche Popolariというイタリアの協同組織金融機関は、19世紀の中頃に、ルツァッティ（Luige Luzzatti, 1841-1929年）という人物にその思想的基礎をもつ。ルツァッティは、当時のイタリアの経済・社会状況を背景として、ドイツへの調査を通じてシュルツェの協同組織金融思想を研究し、これらをイタリアに受容するよう企図した。その後、組織の移入は成功し、イタリア全体に普及した。そし

て、そのモデルの一部は他国において受容されることにもなる。ルツァッティの協同組織金融思想は、世界の協同組織金融思想史の中において、単にイタリアへの導入に貢献したばかりか、世界的な普及過程における結節点となった可能性がある。

しかしながら、ルツァッティについて思想研究上ほとんど言及されることはなく、現在に至っている。特に、日本における彼に関する先行研究は殆ど存在しない。

そこで、ルツァッティがこの協同組織金融

機関である庶民銀行を設立するに至った経済的・社会的コンテクストは何処にあるのか、また、彼の思想の独自性、特に先行する諸思想との相違を明確化する作業をおこない、長谷川（2000）において言及した。本研究はその後入手することができた一次文献（Luigi Luzzatti, “La diffusione del credito e le popolari, Libreria “ Sacchetto, 1863. Luigi Luzzatti, “Introduzione di Luizi Luzzatti all’ opera di Schulze-Delitzsch : Delle Unioni di Credito, ossia delle Banche Popolari “, CO’ TIPI DI G. LONGO IMPR, 1871）を利用し、再検討を試みるものである。その為、長谷川（2000）における記述の必要な箇所については再述し、改めて参照しながら、論を展開するつもりである。そして、この過程を通じて、新しい思想上の解釈・発見、理論的補強、そして場合によっては先行研究の修正を行うことが期待される。

## 1 ルツァッティの動機—イタリアの経済的・社会的コンテクスト

この項目の目的は、彼の著作と既存の社会経済史の文献を利用しながら、彼の思想とそれらの現実化を促した社会経済的要因を探ることにある。すなわち、彼の思想を形作る鋳型を解明することによって、詳細なイタリア史を、特に統計的あるいは実証的にトレースすることが研究の目的ではない。尚、バックグラウンドとしてのイタリアについての詳細は長谷川（2000）を参照して欲しい。ここでは新しいルツァッティの言述に対応する背景のみを、理解する助けとして再述することにした。

ルツァッティは<sup>1)</sup>、1841年3月にベニスに生まれる。彼の両親はユダヤ系イタリア人で、裕福であった。その中において、彼は幼少の頃より自由に教育を受けることができた。パドヴァ大学の法学部を卒業し、政治経済学を

講義することになるが、オーストリア政府にその見解を危険視されることになる。彼は、ヴェネツィアを離れ、新生イタリア王国へと移住し、1863年に、ミラノ工科大学で職を確保する。1864年には、ドイツにてシュルツェの協同組織金融の実態を調査・分析している。帰国後、1864年に、友愛組合と提携して、ローディにて、最初の農民のための庶民銀行（The Banca Mutua Popolare Agricola）を設立する。農民層の状況を鑑みるならば、彼が、農民層のための信用組合を最初に組織したことは驚くにあたらない。しかし、農民向け金融機関の展開は滞り、結果としてはライフアイゼン型を指示したウォーレンボルクにその発展を譲ることになる。1866年には、ミラノで、農民向けではなく、事業者・労働者向けの庶民銀行を設立した。他方、彼の庶民銀行設立までの経歴とは別に、彼は、政治的経歴をもっており、これらが彼の理論を評価する上で様々な影響を与えてきた。彼の最初の政治的経歴は、1869年における農商省の事務官に始まり、1891年に、大蔵大臣となり、1896年に、再び大蔵大臣に、さらに、1903年には、三度目の大蔵大臣となっている。また、この間、産業関係の大臣も勤めている。そして、首相も歴任している。このように、彼の政治経歴は、多彩であり、この時期の政治史を研究する上で、彼の存在を省くことはできない。が、ここでの課題は、彼の政治の軌跡や彼のその方面に与えた影響を探ることではない。戻ることにして。

### 1-1 経済的コンテクスト

協同組合と産業革命はしばしば因果関係において分析されることが多い。産業革命による階層の変動と格差が必要条件となって協同組合運動を惹起させたという論理展開である。この点から見ると、ルツァッティ思想の起点は評価の困難な時点に位置する。イタリア近代工業化の研究者であるTremelloniがイ

タリア統一（1861年）から1914年までの期間を1894年から前を工業化の準備段階、後半を離陸の開始期間としていることを（Clough 1964, 3）<sup>2)</sup> 前提とするならば、1860年代に始まる彼の活動は封建制から市場経済へと移行する分水嶺にあたり、先に示した因果関係とは異なることになる。そこで、まずこの時期のイタリア経済を概観することにしよう。

工業化へとイタリアが往々にして進展しなかったのには次のような背景があるといわれている（Clough 1964, 124-129）。まず、この半島の地理的特徴である。北はアルプス、両脇は海、そして細長い地形に中央に背骨の如く山脈が走っている。これらは、耕作面積を減らし、肥沃な土地を奪い、かなりの部分を限界的土地へと至らしめており、その結果当時の農業生産性は他のヨーロッパ諸国に比べて著しく低く、農業部門からの資本蓄積は望めなかった。また、天然資源についても同様なことがいえた。さらに、内陸交通に至っては殆ど整備されていなかった。1861年のイタリア統一以降政府が最も力を傾注したのは、社会資本特に鉄道網の整備であったことはここに起因する。

外国の介入・旧封建体制の抵抗にあいながらも、戦争等を通じて、1861年に国家統一を遂げることになる（Mori 1979, 61）が、この統一を機に経済的に最も変化したことは、カプールの採用した自由主義経済政策と政府の鉄道建設であり、イタリア全土に普及すべく、大幅な関税の引下げを敢行した。その目的とは、関税引下げによって、諸外国から工業化に必要な安価な原材料を輸入することで、比較生産費説に基づく、競争優位な産業（この場合、繊維産業）を育成しようとするものであった（松浦 1968, 7）。このように、カプールの政策は、古典的な自由主義原理に基づいていたが、ルツァッティが注目した中小商工業者、農業従事者、職工、労働者の各階層に正負の影響を及ぼした。

さらに、イタリア政府は金融制度改革に着手した<sup>3)</sup>。それは、統一以前において様々な呼称で流通していた通貨を一つに統一しようとするものであった。通貨は一つに統一され、複本位制が導入された。しかし、発券銀行の統一あるいは中央銀行化には至らず、この当時において5つの発券銀行が存在することになった（The Journal of Commerce and Commercial Bulletin (ed) 1896, 162-164）。貨幣供給の統制、最後の貸手機能、成長通貨の供給等の役割がこれら発券銀行によって担われるべきであったが、実際は違っていた。これら諸銀行は野放図的に紙幣発行を行い、さらに悪いことに、1866年以降、不換紙幣として強制通貨が認められると、生産的裏付けのない通貨供給量が増大しつづけたのである（Clough 1964, 55）。その結果、激しいインフレーションに度々見舞われることになった。このことは、反面、本位たる金属貨幣の不足を意味していた。

## 1-2 経済政策の副作用

これらの政策が目指した結果はそこからは得られなかったどころか、むしろ経済全体に大きな構造的不安定性を押しつけることになった。というのは、まず、急速かつ偏重した鉄道建設による財政赤字の増大が鉄道以外の社会資本の整備を阻害したということ、第二、統一後の放漫な財政運営による赤字補填を国債に依存したためクラウディングアウトが発生し、利子率の上昇をもたらし、国内産業の生産費高騰を誘発した。第三に、関税の自由化によって、当初の意図とは異なり一次ではなく二次製品が外国から輸入され、資本力や技術力の点で劣勢であった多くの産業が打撃を受けたからである。

これらの諸問題の固定化を受け、各方面から保護主義の声が高まり、自由主義政策を放棄し、保護主義政策へと傾斜していくことになるのは、ほぼ20年後のことである。ただ、

この工業における低迷の時代においても、農業と密接に結びついた繊維工業、食品工業、そして製粉・精米業等は一定の発展を遂げた。特に、今日でも有名な繊維産業は中でも比較的顕著な発達をみせていたことは銘記しておく必要がある。これらに属する人々は、庶民銀行のメンバーとして重要なポジションを占有することになる。

さらに第四として、経済の不安定が挙げられる。特に、貨幣価値を安定化できないということは、安定的な経済成長と経済秩序の維持にとって問題であった。さらに、金融制度を見るならば、発券銀行を頂点に株式タイプの商業銀行・投資銀行においては、鉄鋼や機械産業そして建設といった大企業・大企業向け取引を重視し、しかも銀行数が1870年で19行（その後、急速な拡大と縮小が生じながらも100以上を数えるようになるが、新設立銀行も同様の経営傾向にあった）しかなく、資産として全体の10.9%（1870年）を占有していたが、広範囲な階層に銀行サービスを供給できる状況にあるとは言い難かった。また、個人銀行も存在したが、特別な目的のための業務特に不動産投資を行っており、同様に広範囲な階層に提供するものではなかった。加えて、国民に貯蓄手段を提供する貯蓄銀行（1870年で全体の18.2%の資産）と郵便貯金が広く存在したが、貯蓄サービスつまり貯蓄手段の提供においては広範囲な階層において有効であったものの、それら資金に基づく資金運用先は、抵当貸付や公債投資が主であり、有産者例えば地主階級と政府に資金が回ったにすぎなかった（Manfred 1994, 559）。約20%の金融資産を自らのために利用することができなかった状況は、ルツァッティに影響を及ぼす構造的コンテキストであった。すなわち、激しい景気変動（Talamona 1959, 283）と特定の階層に偏在した金融サービスの提供をおこなう金融構造の存在は、広範囲な国民層の経済生活を脅かした。

そこで、ルツァッティが最初に設立を試みた信用組合に属した農民の状況を概観しよう。

この当時の農民は、日雇い労働者、小作人、折半小作人、そして農業企業家に分けられるが、とりわけ生活困難を極めたのは、前三者である<sup>4)</sup>。Cloughによれば、日雇い農民は、日々の仕事を心配し、数週間も仕事を待ち続け、結果一年に150日労働すれば幸運の方であった。また、小作人は、家族を養い地代を支払うに十分な作物を生産することが困難であった。そして、折半小作人（分益小作）は、親の遺産を相続すること以外何もしない地主に対して、果実の分配さえ払えない状態であった。さらに、最も貧しい農民に至っては、冬には寒さをしのぐため動物と寝ること、そして日々の食事をパンとワインと中身のないミネストローネでしのいでいたという報告があった。また、農民の所得は工業所得よりも低く、都市生活者よりも低い生活水準であったため、機会があれば、農民はすぐにでも都市へと移住しようとしていた。このような状況のため、農村地域では、騒動が絶えず、しかも比較的豊かな地域においてさえそうであった。こうしたことから、イタリア統一以降の発展の基礎はこうした農民の犠牲の上にしかも当時労働人口の過半を占めていたことからして、多くの国民の犠牲の上に築かれようとしていたといえよう。

他方、ルツァッティの視点の対象となった都市部の階層についてみてみよう。Cloughによれば、労働者は14時間ないし12時間働き、賃金は低く、労働条件は悪く、大都市のスラム街より劣悪な生活環境であったと述べている（Clough 1963, 143）。そして、こうした劣悪な条件に対して、職工の組織を除けば、組織的な運動つまり労働運動はまだ現れなかった。それが本格化するのには統一以降しばらくたってからのことである。恐らく、大量生産時代ではないため本格的な工場労働者群が形成されなかったということ、労働運動に対す

る考え方が知識層に止まっていたということ、従って労働者・農民は生活条件改善の為の知識と手段を持ち合わせていなかったということ等が考えられる。その証拠に、ストライキや暴動は見られたが<sup>5)</sup>、どれも単発かつ短命に終わっている。労働者・農民が経済的困窮に追い込まれていたということの証左でもある<sup>6)</sup>。

以上の如く、統一前と以降最初の約20年間というものは、構造的不安定性を指摘することができ、そうした構造はルツァッティの思想が形成され、庶民銀行が設立されるに十分な条件であった。

## 2 金融コンテキストからみた思想の枠組みとその実践的反映

こうした経済構造上の歪みから生じつづけていた様々な経済的・社会的問題に対して、他国同様、社会主義思想が台頭することになるが、注意を向ける者たちはそれらだけではなかった。ルツァッティもその列に加えることができる。ただし、それは文献の発行年からみると、産業革命後の構造から発する諸問題に対してではなく、それ以前の構造に触発されたとみることは自然ではあるが、後述するように、単に象徴である高利貸との関係に矮小化することはできない。また、その後の彼の思想のイタリアでの受容過程は、産業革命以降に惹起する様々な問題と無関係ではないことは銘記しておかなければならない。

### 2-1 社会主義思想と反応

さて、当時のコンテキストに対して大きく反応したのが、社会主義思想であった。

当時の社会思想は、イタリアに1860年代にやってきたバクーニンによってアナーキズムが普及する状況にあり、マルクス主義やドイツの社会政策思想・新歴史学派が移入され強い影響力をもつようになるのは、1880年代に

なつてからのことである。統一以降の暫くの間は、無政府主義が広がり、各地で暴動を引き起こすのであるが、結果から見れば、大きな影響力を持ちえたとは言い難かった。他方、政府の側においても、1860-70年代は、Ferraraの古典的な経済自由主義思想が支配的であり、中小階層の生活改善に注意が集まるということはなかった。また、仮に社会政策的立法がなされたとしても、それらは骨抜きにされ、当初の意図とは程遠いものになっていた (Matassi 1969, 128)。

ルツァッティはまずこのイタリアへとやってきた社会主義思想について、「非常に高ぶった激情あふれる言葉にあまりにも耳を傾け…社会主義へと導く滑りやすい坂の上に身を置く」(Luzzatti, 1863, 180) ことの危険性を説き、警笛を鳴らしている。「人類に天国を約束する社会主義は偽り」(Luzzatti, 1863, 184) ともいう。しかしながら、「抑圧する支配には甘んじて従い耐えねばならない、と明言する、ある種の凝り固まった」(Luzzatti, 1863, 184) 学派についても否定している。後者の学派が具体的にどのようなものを指すかについては明言していないが、現状を肯定する主流的な考えを指示しているものと推測され、古典的な自由主義思想ということになる。

ルツァッティの出発点は、本人も記述しているように、「自由と信仰心」(Luzzatti, 1863, 184) であって、キリスト教に基づいた自由主義思想であるが、経済体制的には自由放任的ではなく、修正された自由主義としてみなされなければならない。それは彼の「労働と資本の友好関係」(Luzzatti, 1863, 186) という言葉に含意されている。そこでは、不平等を緩和し、社会の進歩をもたらすのは融和であり、資本と労働の対立ではなかった。

加えて、信用は自由という基盤があつてこそ初めて成立するのであつて、歴史的には封制度下においては不可能であるし、制限のあ

る体制でも同様であった。ルツァッティがアメリカの事例を出すとき、このことはより一層明白になっているように思われる。すなわち、「地球上でもっとも自由な国である合衆国は、信用を抑制なき奔放さで利用した」(Luzzatti, 1863, 185)と述べるとき、封建的な残滓がない大地に対する憧憬と信用を駆動させる制度的基盤を確信しているようであった。このことは、当時立憲君主制を確立し、自由と民主主義を享受したベルギーへの賞賛にも表れている(Luzzatti, 1863, 200)。

## 2-2 通貨と信用に関する解釈

ルツァッティは困窮等の原因を労働生産性あるいは生産技術といった供給サイドではないと考えていた。そして、理論的探究の末、行き着いた点は信用不足であった。この問題は、しばしば皮相的に単なる金属貨幣の不足問題に終始することがあった。ルツァッティは、イギリスを中心として周辺国でなされてきた議論をトレースし、特に通貨主義と銀行主義との論争に直接的・間接的に触れ、貨幣の不足という問題を金属としての貨幣不足ではなく、信用の問題として捉えた。ただし、貨幣については実物的なモノを前提としていた。故に、貨幣量を少なくすることを主張するとき、それは金属貨幣の節約と同義であった。

節約すべき対象ということになると、彼にとって、セイやリカードのような金属に基づく貨幣量と物価水準の関係を一義的に捉える古典派学者の考えには批判的になるのであった(Luzzatti, 1863, 182)。ただし、先述した1866年にはイタリアにおいては不換紙幣が増発され、不安定性が高まっている経済状況に対する解釈は特になかった。引き続き、思想上の課題として残るであろう。このことをひとまず脇に置くとして、ルツァッティは紙幣を信用の結果として捉える、いわば銀行主義に近い考えを採用した。

つまり金属不足ではないという確信にたどり着いた。そして彼は、それを信用不足へと変転させる。そして、「信用」の内容への接近を試みる。ここには、イギリスを中心とした通貨論争とは異なる視点が入り込む。金の流出入と紙幣の増減と物価水準の關係に焦点を当てていた通貨主義の議論に対して、銀行主義は経済活動の結果としての紙幣の増減として捉えていた。そこに、「信頼」という信用の概念を持ち込んだのである。ここには、経済活動の事前と事後の考えはない。信頼が信用を創出しているからだ。もっとも、金属と通貨増減の関連性を否定する点においては、銀行主義に近いといえ、セイとリカードに対する批判へとつながっている。

この「信用」という言葉は、彼のテキストにおいては、具体的には「信用証券」「信用証書」「為替手形」として表現されており、イギリスにおいては「通貨」という用語、恐らく通用性のある、流通しているという含意において用いているのであろう。

さて、彼は、信用とは信頼であり精神的部分であるという(Luzzatti, 1863, 185)。取引が物的な担保のみに依拠していたならば、取引数は現在よりも減少し、企業は衰退するであろうという。何故なら、明らかに取引が目詰まりを起こすからだ。物的担保を超えた部分の信用量が必要とされる。故に、その部分には面目と誠実が求められ、信用の発展の為に必要とみなされる。さらに、ルツァッティは、貸付枠は「道徳面の性格と教育」(Luzzatti, 1863, 185)に依存し、変動するという。このことが具体的に何を指すかは不明である。

そして、能力のないものによって所有されている資本を能力のあるものへと解放し、資本所有の有無によってもたらされる労働における分断、不平等を緩和させることができるのが信用であると考ええる。信用は単なる商業的道具であったものが、ここでは体制への問題へと昇華する。ルツァッティには資源の最

適配分を考えていたし、比較優位の考えがあった。借主の方がレントと自らの利益の両方を考えるからだという。同時に、社会の分断を憂慮した。これは社会主義に対するものであった。

そして、信用の機能は自然には成立しないと考えた。故に、銀行の仲介機能へと論を進める。ルツァッティは、「出会いの場」ともいつている。銀行がなければ、機会損失は明らかであると見たことからわかる (Luzzatti, 1863, 186)。ただし、彼のテキストにおいては、あくまでも貯蓄と貸出を媒介する機能にとどまっており、信用創造の要素はなかった。また、ここでの銀行は、貨幣の流通速度を高めるための装置として重要と考えた。

### 2-3 当時の庶民金融とベルギーの信用組合

ルツァッティが社会主義に対して懐疑的であったことは言及したが、金融においてはその延長線上としてブルードンの信用の無償化論を批判する (Luzzatti, 1863, 193)。ブルードンは庶民銀行によって、経済の細部にわたるまで、信用を無償で供給することを主張していた。自由に交換が行われ、自由に価格を付けられる体制にするためであった。そしてそこでは信用は金属貨幣と兌換関係にあるべきではないとした。金属貨幣が有限であるからこそ、利子が生まれ、生産が制限的になると考えたからに他ならない。

これに対して、信用の無償化の背後にある全体主義体制をルツァッティは批判し、非現実性としてその主張を退けたのであった (Luzzatti, 1863, 193)。結果として、ブルードンの計画は現実の世界に移された途端に頓挫し、ルツァッティの批判もそれ以上の域を出るものではなかった<sup>7)</sup>。

彼らが一致する点は信用の普及のみであった。その方法に関しては完全に分かれていた。しかしながら、ブルードンとルツァッティが

捉えた金融構造上のコンテクストはそれほど異なっておらず、出発点は一致していた。イタリアの当時の状況に限定すると、以下のことが浮かび上がってくる。

第一に、イタリアは銀行に関して長い歴史を有しながらも、金融サービスやそれを取り巻く法や慣習そして政策といった制度的面の整備が遅れていたということが挙げられる。そのことは、広範囲な階層に金融サービスを提供するフォーマルな金融機関を欠いていたことと同義であった。その証左は、結果として彼の設立した庶民銀行は、その後の世界の協同組織金融史においても見られないほどの経営的発展を記録した (Zamgani, 1993, 140)。換言すれば、基本的な金融機能に対するニーズが高かったということになる。第二に、第一の状況の結果として、インフォーマルな高利貸金融の存在した。例えば、販売価格10ドルのコーンを三ヶ月分割払いの20ドルで販売し、年率換算すると実質的に約400%の利子を取る事例や、交渉時のディナーとワイン (高利貸はしばしば借入者宅に夕食時に訪問した)、手数料を借入者に負担させながら、年率換算して1200%の貸付利率をとる小額貸付もあったという事例もある (Herrick & Ingalls, 1914, 347)。つまり、貸付利子という形態ばかりでなく、巧妙な形で、取引費用として収奪していたのであった。高利貸の存在は、世界各国において、この時期協同組織金融機関設立の直接的な動因の一つになったということはここでも妥当するといつてよいであろう。その一方で、第三として貯蓄銀行の機能に原因があった。貯蓄銀行は高利貸の対象となる階層に対して貯蓄手段の提供というサービスを提供する点で、庶民に対する近接性をもっていたが、貸出に関しては同程度の機能を期待することはできなかった。第四に、慈善組織は存在したが、規模は小さく、また庶民の自助を促すものとはいえなかった<sup>8)</sup>。第五に、最終的には、政府と資本家に

は、こうした諸問題を解決する意思、換言すれば、社会政策的配慮に欠けていたということも挙げられる。経済学者のFerraraに代表される自由主義経済思想<sup>9)</sup>が一般的であった当時の状況はこのことの証左であった。彼らは、こうした問題よりも、比較生産費に基づく自由貿易の推進と産業基盤整備に傾注していた。

ルツァッティは、こうした背景の下で、ブルドンモデルではなく、別の方法を模索した。最初の関心は、ベルギーとドイツでみられた協同組織金融機関であった。名称は様々であり、信用組合 (Unione del Credito) ないしは庶民銀行 (Banche Popolari) として彼はそれらを捉えていた。特に、低所得者層向けへの言及は、ここで言及しているルツァッティのテキストの書かれた1863年の時点において関心があったことがわかる。彼は、これら事例を経済制度としてばかりでなく社会制度の理論として捉えた。例えば、「ベルギーの1848年に設立された信用組合は、レオポルト1世が会員となっており、自由・教育・信用の発展の証としてみなしていた」(Luzzatti, 1863, 201) というように、単なる信用問題として捉えているわけではなかったことは、後に見るように、彼の思想形成に影響を与える事例であった。以下においては、断りのない限りにおいては、ベルギーの事例に関するルツァッティの解釈を見ることにする。

「適切な融資を銀行に頼めない者たちはしばしば偶然に左右されて意気消沈し、必要性に強いられ実に厳しい条件でお金を見つけるか、あるいは倒産」(Luzzatti, 1863, 186) と述べているように、高利貸し・機会損失を問題として捉えている。そして、「信用は庶民にも、工具にも、数限りない季節労働者や日雇い労働者の家族にも役立つであろう」(Luzzatti, 1863, 186) と述べるとき、最初の解決の入り口が信用供与ということにあると考えた。資産に代表される物的担保ないしは

金属貨幣でもなかった。

しかし、対象階層はこの役立つ信用からは遠い位置、すなわち銀行からは排除されていた。これらの階層の唯一の資本は両腕による仕事のみというルツァッティの記述はそのことを如実に表している。しかも、借入機会ばかりでなく、配当<sup>10)</sup>という機会からも排除されているとみる。銀行は大規模事業者にしに関心がなかった。

そこで、ベルギーにおいては、「互いに信用をしてもらうために身を寄せ合い共に同志的な集団」(Luzzatti, 1863, 198) を設立したとみていた。

ルツァッティのこれ以降の記述は、今日では一般的な信用組合の解説となっているため、割愛する。注目すべき着眼点は、資本家・銀行による信用組合への貸付を行った場合であった。これは集団信用の成果であり、しばしば思想史上見落とされる点であった。また、実際においてもこうした役割を求めない組織もあったし、今日でもそうである。ルツァッティは資金の相互性ばかりでなく、ベルギーの事例が実践した集団による保証がもたらす外部資金の獲得にも着目していた。

また取り上げた事例は利益配当を行っており、評価していた。協同組織金融においては、しばしば配当の有無について議論となるが、ルツァッティは全く問題とするどころか、利益の還流の一つのルートとして捉えていた。

さらに、ステイクホルダー問題にも言及した。ルツァッティはこれらの組織を債務者と債権者の二重性により、組織の繁栄のためのインセンティブが形成されているとみる(Luzzatti, 1863, 198)。言い換えれば、借入者と預金者というステイクホルダーが一つの人格の中に同時に存在することにより、モラルハザードが防止されるとみた。

また、信用変動への脆弱性を主張する議論に対しては、事実による反論と、「一人が万人の為に、万人が一人の為に」(Luzzatti,



1863, 203) というセンテンスを用いながら、選好のズレによる流動性リスクの低減を主張した。さらに、組合員は脱退後も責任を負うことから、さらなる安全装置が働いているとみていた。しかしながら、これらの回答が脆弱性に対する解となり得たかは、さらなる検証が必要であろう。

最後に、階級ごとに金融機関設立すべきであると主張した (Luzzatti, 1863, 200)。ベルギーのブリュッセルに在する信用組合は、1849年には218, 1863年には2111組合員となっており、富裕でない人々によって占められていたことを、ルツァッティは例として挙げ、規模よりも、その同質的な階層に着目していた (Luzzatti, 1863, 204)。この考え方は、シュルツェのそれと親和性をもっており、逆に、ライファイゼンによる有識者層と農民の組み合わせとは異なっていた。

彼は、こうした海外の観察を通じて、自身の協同組織金融思想を形成していったのであり、着目点そして取り上げ方を通じて、固有な視座を確認することができる。そのことは以下においてもっともよく表れている。

#### 2-4 シュルツェ型信用組合への接近

ルツァッティは、ドイツのシュルツェの著作のイタリア語訳版に序論を寄せている。その論文に依拠して、シュルツェに関する解釈を明らかにするとともに、イタリアへの導入とイタリア庶民銀行との異同の手がかりとしたい。尚、シュルツェについては、長谷川 (2000) を参照。

まず、シュルツェの方法論について、先行研究によらず、またアприオリな社会構想を打ち立てわけでもなく、実践によって理論的に探究した稀有なる方法として高く評価していた。しかも、単に真実を明らかにしたことに終わらず、真実を別の言葉をもって首唱したことも讃えている。その内容は、無血革命であり、政治的従属からの解放、そして道徳

的・経済的能力の重要性を主張するものであったという (Luzzatti, 1871, 270)。ヨーロッパの産業革命前夜の時代的コンテクスト、すなわち封建制の終焉と解放、分解されずに残っている諸階級、そして「心の習慣」を反映した評価であった。心の習慣は彼にとって庶民の道徳であり、庶民銀行においては象徴としての資本であった。

他方、前述した社会主義の実験、特にプルードンの庶民銀行の失敗を挙げ、シュルツェの活動を「ひっそりした」 (Luzzatti, 1871, 272) ものであると対比したうえで、前者を批判したのであった。この形容は、プルードンとの対比ないしは社会主義に対するアンチテーゼを含意している。ルツァッティは、国の支援と慈善行為の否定をシュルツェの中に見たのであり、彼の経済体制に対する考え方を示していた。プルードンでも、ライファイゼンでもなく、シュルツェであるところに、彼の自由主義的態度がある。そして、自立共助の考えをとる。そのため、自らの貯蓄を拠出し、互いに助け合うシュルツェの仕組みに賛同する。

また、ルツァッティは、シュルツェが考える生産手段の獲得と獲得するための資本の利用とその受益権への参加を述べるとき、あとの二人にとっては必要でないにせよ、貯蓄の拠出は必然的な筋道であった。プルードンにおいては信用という手段の無償提供、他方同じくドイツで生まれたライファイゼンの思想とその実践には受益権は登場しない。ルツァッティにおいては、受益権という配当の権利は協同組織金融内部における異同の基準として見られるようになってきた。ただし、資金拠出ができる、銀行から排除された貧しい階層という条件が明確化されることになる。それは、ドイツのライファイゼンが前提した階層よりは上位であり、当時の資本家ないしは銀行が前提とする階層よりは下位に位置する層であるとルツァッティはみる。し

かも、彼は、このことをドイツ庶民銀行の根本的欠陥として考えるのである (Luzzatti, 1871, 277)。ドイツの事例に対する批判的評価すなわち、「貧しい階級の富裕な者たち」(Luzzatti, 1871, 77) への制限的な信用供与を対置させ、全員に庶民信用が届くことを真の民主主義として主張した。

そして、労働と高潔が担保であると主張することで、全員がその可能性にあることを暗喩したのであった。尚、こうした道徳的価値を有していない者もいたはずであり、庶民銀行に学校という役割を与えたのであった (Luzzatti, 1871, 274)。さらに、貯蓄は勤勉さの表現であり、美德であり、道徳的価値を測定する目に見える証であるという。ここで、彼は、信用を得るために必要な貯蓄を該当する階層に求めることはできないとしながらも、全く貯蓄が不可能な階層はいないと考えた (Luzzatti, 1871, 279)。一瞥すると、上述したシュルツェとの境界線が不明瞭になるが、拠出額が比較上少ないことをもって、両者の境界となっていたのかもしれない。また、楽観的な考えという批判も十分に考えられる。

尚、ここでいう排除とは、取引拒絶ばかりでなく、銀行の不利な取引条件、高金利、そして機会主義的な行動、場合によっては高利貸しを意味し、公正な取引からの除外を意味していた (Luzzatti, 1871, 273)。

こうした異なる点を除けば、基本的な構想においては、全面的にシュルツェを評価していた。すなわち、自由と自立を前提とし、諸問題を協同を持って解決を図ったシュルツェの方法への賛意であった。反対に、同じように影響力のあったライフアイゼンに関する評価は見られず、今後の課題として残った。いずれにしても、シュルツェ型の分析は、以下に述べるイタリアでの移入過程において反映されることになる。

### 3 ドイツからの移入と変容

#### 3-1 思想の基底

Wolffによれば、ルツァッティには「非集中化（反独占）、独立、協同」(Wolff, 1919, 247) という思想があったという。Wolffのルツァッティに対する表現は、当時のイタリアが資金集中、競争市場、そしてそのことに対する是正としての社会主義（政府の介入）思想があり、それらの反対語を表していた。ルツァッティは、初期の協同組織金融がしばしば目指す高利貸の駆逐のみを考えていたのではなく、その高利貸の発生を許す構造全体の是正を模索していたものと考えられる。高利貸し問題に限定するならば、法的・政府機関の設立等の方法あるいはキリスト教そのものの協議が当時においても主張されていた。そうした考えに同意しなかった。彼の目指した庶民銀行という組織そのものが、後に述べるように、当時の社会・政治構造とは異なった、分権的・民主的な参加型の組織を基礎としている以上、このことは明らかである。庶民銀行という仕組みは単なる方策を超えていた。故に、非集中化と独立という形容は相応しいものと考えられる。

そして、もう一つの支柱として、物的担保により借入という伝統的金融スタイルではなく、別の保証を見出した。すなわち、「誠実」であった。これらの性質が信用を作り出すとルツァッティは考えた (Luzzatti, 1864, 185)。確かに、当時において貸出は担保・抵当の有無が一般的な基準のようにみえるが、他方においては、他国における既に流通していた多量の為替手形の存在も観察できた。これらは必ずしも資産を担保として流通しているわけではない。そうであるならば、無形な何かに拠り所を求めなければならなくなると考えたわけだ。

ところで、誠実はそれを作り出す道徳面の性格や教育の水準に依拠すると考える (Luz-

zatti, 1864, 185)。誠実を道徳あるいは倫理学という視点から考えると、この時代のコンテキストに合わせた分析により様々な解釈が可能であろうが、金融取引においては、シンプルであり、誠実は契約を履行する意思であると規定できる。そのためには間接的には政治的安定は必須であった。また、「仕事熱心で律儀な人間たちの集団によって彼は保証される」(Luzzatti, 1871, 274) ことになるというとき、誠実は返済努力というモラルの問題ばかりでなく、生産という物的活動をも含意していた。

そして、「すべての誠実な人々が、互いに手を組み、わずかながらの貯蓄を託し始める協同組合を組織すれば、彼らは容易に信用を得ることができる」(Luzzatti, 1871, 274) というとき、はじめて誠実と協同が結びつく。

協同は、「一人はみんなの為に、みんなは一人の為に」という慈悲深いモットーは、現実世界へと言葉を伝えるために、理想であることをやめた」(Luzzatti, 1871, 275) というように、彼の思想の基層であるとともに、実践的な言葉であった。空想的な考えには批判的であった。空想的・理想論的言葉を実践へと変える協同組織に自信をもっていたのである。

併せて、協同とは隣人愛であったというとき、ルツァッティはシュルツェの説明の中に隣人愛を組み込むながらドイツの協同組合を説明しているが、宗教的パークボーンを示しているとともに、当時においては自然な言葉の発露であったともいえる。また、ドイツのライフアイゼンも隣人愛の原理を唱えていることから、なおさらであろう。重要なことは、隣人愛を唱え続けたキリスト教ではなく、現実の世界、特に金融という領域で実践したことにある。つまり、隣人愛の実践が協同であった。

さらに、隣人という言葉には地域を含意しており、彼の構想が協同組織であると同時に

地域金融機関であることも付け加えておかなければならない。

ところで、隣人愛に基づく協同の実践を主張する時、ルツァッティはしばしば集団信用の考えを表している。一組合員が集団的に保証されることによって資金調達を可能とする考え方である。当該テキストにおいてはこれ以上の言述はないが、一般的に言われてきた資金を相互に融通しあう相互性とは異なる概念であり、外部資金調達源に対する保証を提示していたのである。お互いに資金を融通しあう日本の頼母子講あるいは回転式信用組織とは異なる、すなわち協同して集団的に信用を作り出す働きを明示したことになる。従って、「自らの利益を追求しながらも、他者の利益を阻害しない方法が協同」(Luzzatti, 1871, 275) という言述は、単なる資金の相互利用を超えた信用利用を意味していた。

こうして、一次と二次文献から明らかになる思想的支柱としての独立、分権、誠実、隣人愛そして協同は矛盾することなく、一貫した考えとなって、協同組織という器の中で実践されることになる。

### 3-2 実践に反映された思想

さて、このような基本的構想に基づいて、ルツァッティはシュルツェを参照しながら、イタリアにおける思想の実践を図った。実践を見れば、これまでテキストから導出できなかった思想の一部を検証することができる。

まず、貯蓄手段の提供についてみてみよう。初期から一定の期間を経ると、出資、預金、債券、そして入会金の種類がみられた。これらの方法は、表面的には、先行した、あるいは後続の協同組織金融機関に共通しているようにみられるが、内容は異なっている。それぞれに地域・国・時代によって、名称が同一であっても、質的に異なっていた。出資金は、当時のドイツのシュルツェ型に比べて、小額であったという (Wolff, 1919, 200)。シュル

ツェは、貯蓄を強制することによって強制的に貯蓄を蒐集する銀行を目指した。確かに、強固な資本を迅速に蓄積するためには、最も有効な手段であった。しかし、ルツァッティはそうした手段を採用せず、小額出資としたが、その一方で、出資分割払いの期間を短縮しようとした。そこには、小額ではあるが限定的で確実な資本をメンバーが提供すること、低所得者層への参入障壁を低くするという意図があった。ただ、後者については、短期的に小額とはいえ払い込まなければならないということ、そして当時の絶対額から考慮すると、必ずしもそうとは言えなかったという批判も明記しておかなければならない(Herrich, 353)。先の言及はここでも想定されるメンバーの範囲の設定を難しくする。いずれにしても、史実として、額が小さい故に、積極的な出資の完全な払込の推進がなされる一方で、組合員数は成長し続けた。(Tucker, 216)。

この出資金の性格は、貸付資本というよりもむしろ保証資本として機能した。つまり、今日でいう自己資本として庶民銀行の債権者(預金者、出資者、債券購入者)に対して一定の保証を与える役割を果たした。その点で、出資金を貸付資本として運用する他の協同組織金融機関とは異なっている。その背景には、当時の繰り返し発生した信用不安があるであろう。また、同様の意図をもって、入会金についても、保証資本として機能していた。

次に、預金は、ルツァッティの独立の思想を支える要である。ほぼ同時代のドイツのライファイゼン型協同組織金融機関は富裕者からの資金拠出等により、自己資本蓄積の乏しいが、無限責任を負う農民に対して資金供与をおこなった。ルツァッティは、そうではなく、むしろ預金に依拠した<sup>11)</sup>。それは、外部に依存しないという資金的独立という点だけでなく、ドイツと異なって無限責任を否定し、有限責任を導入したことも関係したのであ

ろう。

尚、貯蓄は協同組織金融機関における資金調達の中で簡便な手段の一つであるが、もっと広範囲な文脈で捉えられていた。貯蓄はものとかねの節約であり、経済的には自己の資本蓄積を形成するが、他方、信用を証明するための道徳的な象徴でもあり、故に、教育の対象であった(Luzzatti, 1871, 274)。さらに、貯蓄を地域資金循環の核として考えていた。この考えは、貯蓄資金がミラン等の大都市に集中し、それ以外の地域では資金枯渇している資金偏在を反映していたのであろう(Wolf, 224)。

このように、貯蓄にはルツァッティにとって様々な意義が含蓄されていたが、そこには欠点もあった。その簡便性の表裏として引出し可能性、つまり流動性リスクが高かった。そこで、これを補完する形で考えられたのが、長期の利子生み債券であった。そしてこれは、流動性の高い預金としてというよりも長期保有の目的で購入されたようである。しかし、利子率も高く、庶民銀行にとっては重荷であったと推察される(Wolf, 224)。また、この試みは期待したほどは成功しなかったといわれていることからして(Tucker, 216)、当時においては重要視すべきではない。また貯蓄預金の引出しも実際には結果として問題にはならなかった。この事に関しては、資料上の制約から、ルツァッティの詳細な考えとその結果が不明であり、後の検討に委ねたい。

最後に、上述以外の資金調達手段として、シェアは小さいながらも、貯蓄銀行や友愛組合からの有償・無償の支援があったことも付言しておきたい。それは、ルツァッティの組織が、全組織ではないにせよ、社会的目的を持つ機関として認知されていたことを意味する。

さて、次に貸出についてみる。ルツァッティは、恐らく二つの、すなわち、引受手形割引と現金信用を認めていた。二つの信用供与が

生産・流通のどの過程において実行されるかは不明であったが、ルツァッティが融通手形を拒絶するという観点から考えれば、いずれの種類も基本的には、実物経済と同期した形で供与されていたと考えることができる。すなわち、生産的・家計的目的以外の貸付は拒絶されたということである (Cohen 1977, 74-81)。しかしながら、物的担保が融資判断の一位となっていたわけではない。

そこで、担保として最も重要視されたのが、前にも言及したように、借入者の性格であった。すなわち「誠実」であり、ルツァッティによれば、この行為をもって、「誠実の資本化」(Wolff, 202) といわしめたほどである。そして、それは、複数の保証人によって、確認され、補強された。そこには相互信頼の熟成の必要性が付与されていた。協同組織はこれらを可能とし、他の企業形態によっては完全に模倣されない手法となった。もっとも、一般銀行はこうしたことに関心はなかった。また、リスクマネジメントからみても、効率的なシステムであった。さらに、これを補強する形で、様々な動産担保が用いられた。それは、職業や事業によって、様々であった。むしろ、こうした二次的担保は借入の絶対的条件であったというのではない。あくまでも「性格」が第一順位を占有していた。他方、このような動産に対して、不動産担保は敬遠された。また、出資に基づき2倍まで貸出を行う仕組みがあったが、有産者優遇という理由で強い批判に常に晒されていたし、全ての庶民銀行において行われていたというわけではない。この部分については二つのテキストからはルツァッティの見解を明らかにすることはできなかった。

貸出額は、一般的に小口であった。それは、彼の非集中化という思想が反映された結果である。しかも、リスク分散と流動性を高めるという結果にもなった。

尚、ルツァッティの考えから直接実践化さ

れたものであるかどうかは不明ではあるが、オナーローンという制度を取り入れた庶民銀行もあった。これは、貧しい人々に対して貸し付ける制度であり、慈善ではないが、金利やその他の条件等で様々な優遇措置があった。これは、「ルツァッティを讃える」と呼ばれていた。

さて、上述の如き様々な貸出を通じて、庶民銀行にはその結果として一定の収入そして収益が確保されることになった。この収益は、他国の協同組織金融機関において見られるように、四分の一から三分の一の割合において、準備として内部留保にまわされた。そして、残余に関しては、組合員に配当されたのであった。尚、後に、ルツァッティの意図とは別に、イタリアの庶民銀行の一部には、収益の一部を借入者に還元する動きもあった。

### 3-3 民主主義的マネジメント

Tuckerが「全く無給の職員によってこの複雑な仕事を行うために、ルツァッティは必然的に複雑な管理組織を工夫した<sup>12)</sup>」と述べている。ルツァッティの庶民銀行は多くの委員会を有し、運営を行っていた。このことについて、ここで組上に載せた二つのテキストから、具体的なマネジメントの構想と実際についての言述を引き出すことはできなかった。しかしながら、ここでは、テキストにおける社会主義に対する批判と自由・信仰への傾倒、ドイツの協同組織金融機関への評価そして新しいイタリアの誕生は、民主的な実践を促す思想的基盤となっていたと推察される。換言すれば、分権的なシステムである。そこで、こうした視座から実際の当時の庶民銀行の機構をみることによって、彼の思想を再確認することにする。

まず、総会であり、全ての組合員が参加でき、出資額に関係なく、一人一票の権利を行使する庶民銀行における最高の議決機関である。この総会は通常一年に一回であるが、理

事会の一定数、あるいは組合員の一定数の発議がなされた場合、緊急に招集することが可能であった。

しかし、年一回の総会では、庶民銀行を実際に運営することはできない。そこで、理事会(Consiglio)がある。この理事会は、庶民銀行の業務の全てに対して、その実行に関する最終権限を有している。それ故、この権限の不正使用、つまり経営管理リスクを防止するために、理事会のメンバーは、毎年三分の一ずつ、総会の選挙によって改選された。また、無給であった。

次に、この理事会を現実の実務面から支えるのが、運営委員会(Sindaci)である。この委員会による経営管理機構は理事会の意志を忠実に実行することにその使命がある。その意味で、事業時間における理事会の代理として全ての権限を有している。基本的に職員は総会ではなく、理事会によって任命された。

いずれも、分権、自由、そして自立の思想の具体的な反映であった。

ところで、以上の機構は主として庶民銀行全般を扱ったものであるが、次に見るのは、より個別的な委員会である。まず、挙げなければならないのは、貸付委員会(Comitato di sconto)である。この委員会は、他の委員会に比べて、年次総会によって、二年を任期として、比較的大きなメンバーによって構成されていた。そして、この委員会は、理事会や運営委員会からも独立した存在になっている。そのことによって、組合員から申し込まれた融資の承認・拒絶に関して独立性を確保しているのである。また、この委員会は、業務の円滑化を意図して、組合員による融資申込みの有無に関係なく、組合員の信用度を計測し、記録(Castelletto)に止める作業を行っていた。

さらに、この委員会に続いて、貸出に関して、リスク委員会(Comitato dei rischi)が存在した。この委員会は、「全てのローン

と貸付の軌跡を記録し、全ての借入者と保証人を記録にとどめ、支払い能力に支障をきたすかもしれない全ての事実をノートする」(Tucker, 219-220) ことにあった。前述の委員会が、借り手の支払能力に関する情報の収集・分析する能力を果たす機関であるのに対して、いま述べている委員会は、むしろ借り手の支払努力を監視し、債権の保全を目的とするいわば債権管理機能を発揮している機関であった。

ところで、貸出に関して付け加えたいことは、オーナー委員会の存在である。前述の貸出に関する運営を司る委員会である。これは全ての庶民銀行に存在していたわけではないが、存在していた庶民銀行では、損失も少なく(Tucker, 220)、委員会の意図は成功を証明していたと考えられる。この意義については後に述べることにする。

最後に、ルツァッティ型庶民銀行の全機構の行為に関する苦情の申し立てを受ける調停委員(Probiviri)の委員会があったことを明記しておきたい。この委員会は、組合員の融資申込みに対する拒絶や除名処分、非組合員の加入拒否等の申立を調停する組織である。この組織の決定は最終的な判断であり、絶対であった。

二次文献を利用した記述であったために、不十分な箇所があったことは否定できないかもしれないが、ルツァッティが主張した自由かつ独立の思想は、こうして実践に投影されたことを確認できた。逆に言えば、実践から彼の考えを検証することができた。

## おわりに

二つの一次文献によって、先行する研究、特に長谷川(2000)と異なる、以下のような点が新たに解明された。すなわち、協同組織を選択した理由の一つとして社会主義に対する反対、特に社会主義的銀行システムに対す

る批判が明らかになった。次に、困窮・貧困問題を、実物経済の構造ではなく、貨幣経済に求め、さらに貨幣不足ではなく信用不足への理論展開の中で信用を供与できる金融機関の必要性、しかも庶民銀行を認識するに至ったことは、協同組織金融思想史の中でも稀有かつ独特な展開であった。言い換えれば、信用普及は社会制度の問題として捉えていたのであり、高利貸を対象とした多くの協同組織金融の実践家とは異なるものであった。高利貸駆逐を超えた思想上のプランと実施がそこにあった。さらに明らかになったことは、二つの論文に度々現れた自由と自立という考えであり、これら思想的レンズを通じて、当時のイタリア庶民銀行のマネジメントの思想的基底を抽出することが可能となった。言い換えれば、自由を獲得するためには自立したマネジメントが必要であり、そのためにボランティアを中心とした分権的かつ重層的な組織が形成されたのであった。

最後に、無資産・担保者にとっての担保と

しての「誠実」は彼の中心概念であり、誠実な人々による「協同」が銀行を作り、集団信用を創出する。その誠実は他者に認められることによってはじめて意味を持つ社会関係資本である。協同も同様につながりという社会関係資本である。これら社会関係資本は、彼の思想の中心的概念として位置づけられ、しかも普及と実践での成功に貢献したと考えられる。反対に、誠実でない者が庶民銀行に参加したとしても、庶民銀行の仕組みこそがこれら組合員に対して誠実な行動を強いるないしは促し、庶民銀行は成功するという解釈、すなわち制度を成功要因とする考え方によって、ルツァッティ自身の思想を説明することは困難であることは銘記しておく必要がある。

(注)

- 1) ルツァッティの経歴に関しては以下の著作を参照した。Tucker, 1967, pp.211-212.
- 2) トメッリーニの解釈は次の文献より参照している。Clough, 1964, P. 3.
- 3) 金融制度改革全般に関する記述は、以下の著作に多くを依拠した。Cf. Fratianni, Michele & Spinelli, Franco, 1997, ch. 3.
- 4) Clough, pp.141-142. 以下のこれに関する記述は本書に負っている。
- 5) 1860-1878年の間において、452回のストライキがあり、主として賃金要求によって引き起こされたという。Matassi, p128.
- 6) 他の理由については以下の著作を参照。山崎, 56-57ページ。
- 7) 参照したテキストからは、より詳細な批判を確認することはできなかった。
- 8) 山崎, 137-139, 140-141ページ参照。自発的組織の数の小ささに反して、同じ自助的な組織であるルツァッティの運動が成功した点は興味深く、前者に関する詳細な分析が今後も必要となるであろう。
- 9) イギリスの古典期的な自由主義思想とは異なる点があった。ここでの論点ではないため別の機会に譲る。Cf. Bousquet, 訳書, 148-194ページ参照。
- 10) 配当は、当時の該当する階層にとって稀有な考えであった。
- 11) 一部の株式銀行からの借入もあった。
- 12) 以下の管理機構に関する記述はTuckerの著作に多くを依拠している。Cf., Tucker, 216.

(引用・参考文献)

- Bousquet, G. H. (1960), *Esquisse d'une Histoire de la Science Economique en Italie*, M. Rivière. 橋本比登志 訳『イタリア経済学抄史』嵯峨野書院, 1976.
- Clough, Shepard B (1964). *The Economic History of Modern Italy*, Columbia University Press.
- Cohen, Jon. S. (1977), *Finance and Industrialization in Italy, 1894-1914*, Ayer Co Pub.
- Fratianni, Michele & Spinelli, Franco, (1997), *A Monetary History of Italy*, Cambridge University Press.
- Herrick, Myron T. & Ingalls, R. (1914), *Rural Credits: Land and Cooperative*, Kessinger Pub.
- 長谷川勉『協同組織金融の形成と動態』日本経済評論社, 2000.
- Luzzatti, Luigi, "La diffusione del credito e le popolari, Libreria" Sacchetto, 1863.
- Luzzatti, Luigi, "Introduzione di Luizi Luzzatti all'opera di Schulze-Delitzsch : Delle Unioni di Credito, ossia delle Banche Popolari" , CO'TIPI DI G.LONGO IMPR, 1871.
- Manfred Pohl (ed.) (1994), *Handbook on the History of European Banks*, Cambridge University Press.
- Matassi , L, "The Italian Economy in the late Eighteenth and Nineteenth Century", *Review of Economic Conditions in Italy*, Vol.23, 1969.
- Mori, G, "The Process of Industrialisation in Italy;Some Suggestion,Problems and Questions", *Journal of European Economic History*, Vol.8, 1979.
- Talamona, M. "Builing Fluctuations and Business Cycle in Italy: 1863-1945", *Review of Economic Conditions in Italy*, Vol.13, 1959.
- The Journal of Commerce and Commercial Bulletin (ed.), (1896) *A History of Banking in all the Leading nations*, The Journal of Commerce and Commercial Bulletin.
- Tucker, S. *Evolution of People's bank*, 1967.
- Wolff, Henry W. (1919), *People's Banks*, P.S. King.
- 山崎功『イタリア社会運動史』淡路書房, 1957
- Zamgani, Vera, *The Economic History of Italy 1860-1990*, 1993.